



お薦めの1冊

No.24-5②

出版社：朝日新聞出版

ディラン・ヘルナンデス、サム・ブラム 志村朋哉聞き手・訳

米番記者が見た **大谷翔平** (メジャー史上最高選手の実像)

林 但

本を読んでいる途中でこの本はいつ発行されたか見てびっくり、2024年4月30日発行であった。前にも書きましたが、ここ1,2年は大谷翔平選手に関する本をよく読んでいます。**野球の母国・アメリカを虜にした、「SHO-TIME」の舞台裏に迫ると本の裏表紙に書かれており5章まで204ページを一気に読んでいきました。**ここでは日本人ばかりでなくアメリカ人をも魅了する大谷翔平選手、アメリカ人がどこに魅力を感じたか考えてみたいと思い紹介させていただきます。

この本はディラン氏、サム氏と志村氏が対談を行いながら本にまとめられている。「アメリカで大谷翔平選手がどう評価されているかが良く分かった」この24年のシーズが始まって1ヶ月半くらいだったが、ますます毎日が楽しみです。

昨年のWBC決勝戦を対談した3人ともが最終局面で、大谷とトラウトが対戦した時にこんなことが起こるのかと興奮が最高潮に達したらしい。**WBCでの大谷はパフォーマンスが最高潮に近い状態**であった。野球では、よいスイングをしても、運が悪くて結果につながらないこともある。頑張っても報われないことがあるスポーツで、チームを勝利に導こうとする意志が感じられたとディラン氏は語っている。トラウトとの勝負は永遠に歴史に刻まれる瞬間だと思う。また、準決勝での打席も印象に残っているとの事。**パフォーマンスが発揮された証拠で、特別なアスリートの証だとも述べている。**

大谷は世界最高の野球選手だと思うか？ 間違いない。議論は史上最高かどうかである。現役選手と比べると頭が一つも二つも抜けている。アメリカに渡ってからの6年間で、野球がうまくなることだけに集中して、毎日、少しずつ積み上げてきたことで、大きな差が生まれている。野球選手として完成度合いを比較したら、同じ次元の人はいない。大谷は二刀流選手としてベーブルースをも超えた。おおよそ100年前のベーブルースの時代と違って今の投手はけた違いに速いボールを投げる。ただ、ベーブルースは社会的影響力が凄かったことは理解している。(サム氏)

22年後半に見せた圧倒的なピッチングが印象に残っている、このようなピッチングをすればまだまだ伸び代がある。22年ピッチングと23年のバッティングの両方が見たい。

大谷の活躍を通して、アメリカが取り入れた方がよい日本文化のすぐれたところが注目されることは良いこと。自分たちのやり方以外にも、いろいろなやり方があることに気づくからである。異なる文化に目を向けさせ、その素晴らしさ認識させることができる。

今回は1ページにまとめようとしたためまだ紹介したいものもあるがここまでとしたい。ディラン氏は地元紙ロサンゼルス・タイムズでスポーツのコラムニスト、サム氏はスポーツメディアのエンゼルス担当記者である。志村氏はアメリカメディア唯一の大谷担当記者との事。3人の話から特に気づいた所を挙げたが、他にも重要なことがないか確認を行っていきたい。 以上